

機関番号： 12613  
 研究種目： 基盤研究（A）  
 研究期間： 2008～2010  
 課題番号： 20242015  
 研究課題名（和文） 「書物・出版と社会変容」研究の総合化に向けて  
 研究課題名（英文） “A Synthetic Study of Books, Publishing and Social Change in Japan”  
 研究代表者  
 若尾 政希（WAKAO MASAKI）  
 一橋大学・大学院社会学研究科・教授  
 研究者番号：80210855

研究成果の概要（和文）：(1)〈書物・出版〉と〈社会〉との相互的關係の様相を解き明かしていくために、A書物・出版と環境、B本屋・出版、C写本と刊本、D流通、E享受者・読者、F作者・思想家の6つ研究項目班を設定した。(2)日本各地でフィールドワークを行い、資料の整理・掘り起こしを行った。(3)「書物・出版と社会変容」研究会を3年間で25回開催するとともに、雑誌『書物・出版と社会変容』を6号出し、研究成果の一端を収載した。

研究成果の概要（英文）：1.The following six project subgroups were formed in order to elucidate the mutual relation between books, publishing and society: (A) Books, publishing and environment (B) Publishers and publishing (C) Manuscripts and published books (D) Circulation of books (E) Readers (F) Writers  
 2.Through several fieldworks conducted in the last 3 years, the project subgroups found and organized historical documents and books.  
 3.“The Society of Books, Publishing and Social Change” met 25 times in 3 years.,and the Society published 6 issues of Books, Publishing, and Social Change in 3 years. The 6 issues contain articles, reviews of historical documents and books, and fieldwork reports.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	9,600,000	2,880,000	12,480,000
2009年度	7,900,000	2,370,000	10,270,000
2010年度	7,900,000	2,370,000	10,270,000
年度			
年度			
総計	25,400,000	7,620,000	33,020,000

研究分野：日本史、近世史、思想史、文化史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本史、文化史、思想史、総合史、出版文化

#### 1. 研究開始当初の背景

(1) 日本近世史研究において、書物が注目されるようになったのは、近年のことである。戦後、各地の蔵に眠っていた文書が歴史を叙述する一次資料として脚光を浴び、日本全国で史料調査が行われ文書の整理や目録の作成がなされてきた。ところが、そこでは手書

きの文書のみが重視され、文書とともに書物が出てきても、「邪魔もの」扱いにされ整理の対象とならなかったり、整理したとしても目録の「雑」の部に入れられ分析の対象となつてこなかったりした。それに対して、書物に着目して書物を史料として近世史を語るうとする研究動向が出てきたのは、1990

年代半ば以降のことである。たとえば横田冬彦氏（研究分担者）は、畿内をフィールドにした蔵書調査から、知的読者層の成立、知の水準を踏まえた近世的支配という新鮮な論点を提起した。このような研究動向を踏まえて2000（平成12）年には、『歴史評論』が「書物と読書からみえる日本近世」という特集を企画した。その反響は大きく、書物に関心をもつ研究者が増加し、いまや近世史研究は、文書に加え書物をも史料として歴史を叙述できる、新しい段階に到達しているといえよう。なお、海外でもフランスの社会史研究者ロジェ・シャルチエらの読書の社会史研究の影響もあり、書物への関心が高まっている。本研究の成果を積極的に海外にも発信していきたい。

（2）本研究の研究代表者は、2003（平成15）年8月に、「書物・出版と社会変容」研究会を立ち上げ、参加者を募った。当初は、日本史研究者のみによる数人程度の参加者による会合ができ、若干の意見交換ができればいいと思っていた。しかし、実際始めてみると、日本各地から研究者が参集し、報告者の研究報告をめぐる、熱心な討論が続けられた。しかも参加者の専門は、日本史だけでなく、近世文学、日本語学、書誌学、民俗学、教育史、宗教史等々、多岐にわたっていた。すなわち「書物・出版と社会変容」研究への関心は、日本史研究者だけのものではなく、広く人文学の研究者に共通のものであったのである。2004（平成16）年11月、研究代表者は、それまで11回の学際的な研究会活動を通じて共同研究を結成する機運が熟したのを受けて、科学研究費基盤研究（A）「日本における書物・出版と社会変容」を申請し、2005（平成17）年4月に採択された。「書物・出版と社会変容」研究会は、2007（平成19）年10月現在、34回を数えるに至っている。

（3）これまで34回の「書物・出版と社会変容」研究会の議論等を通して、「書物・出版と社会変容」研究に関する個別事例にもとづく研究成果を共有してきた。そうした蓄積をさらに分厚く積み上げていくとともに、書物・出版の歴史的意味をより精緻に把握していかねばならない。さらに「書物・出版と社会変容」研究を軸にして、いかに時代・社会を描くのか、いわば「書物・出版と社会変容」研究の総合化に向けて歩みだす必要がある。同時に、「書物・出版と社会変容」研究が個別分散化している人文諸科学を再編・統合する基軸となり得るのではないかと、考えた。以上、本研究は、専攻を異にする研究者が一堂に会し討議する、さらには共同でフィールドワークをも行い、その成果を共有すると

もに、諸専攻が共有できる書物・出版の資料論の確立をもめざそうとするものである。

## 2. 研究の目的

（1）日本近世は、日本列島において初めて商業出版が成立し、版本と写本とが流通し読まれ書写された時代である。書物の登場とその普及は、17世紀から現代までを書物の時代と一括りできるほどの大きな変革であった。いったい、なぜ17世紀に商業出版が成立したのか。書物が、領主層から民間までに急速に流通・普及したのはなぜか、書物・出版が媒介する知（知恵・知識）は、どのような歴史的役割を果たしたのか。このような<書物・出版>と<社会>との相互的關係の様相については、いまだ十分に明らかになっていない。本研究は、こういった問題を追究する研究を「書物・出版と社会変容」研究と呼び、古代・中世から近現代までを射程に入れて、日本における書物・出版文化の歴史的位を総合的に研究していこうとするものである。くわえて本研究では、①「書物・出版と社会変容」研究を軸にすることにより、どのような日本史像が見えてくるのか、研究の可能性を見通したい。さらに、「書物・出版と社会変容」研究が、日本史学だけでなく、近世文学、日本語学、書誌学、民俗学、宗教学、教育学等、広く人文諸科学研究にどのようなインパクトを与え得るのか、その可能性も追究したい。

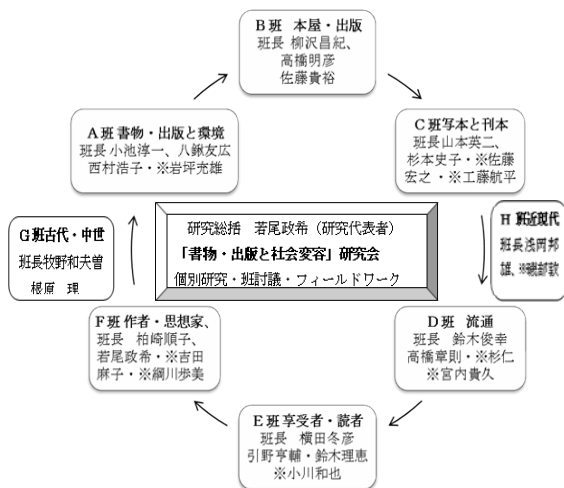
（2）本研究では、次の3つの課題について重点的に取り組みたい。①なぜ17世紀に商業出版が成立したのか。書物が、領主層から民間までに急速に流通・普及したのはなぜか。書物・出版が媒介する知（知恵・知識）は、どのような歴史的役割を果たしたのか。このような<書物・出版>と<社会>との相互的關係の様相について、個別事例に基づいた研究成果を蓄積する。②日本史だけでなく、近世文学、日本語学、書誌学、民俗学、教育史、宗教史等の研究者をも糾合し、研究会を開催し、共同でフィールドワークを行うことにより、書物・出版に関する資料論を確立していくために議論を深めていきたい。③「書物・出版と社会変容」を基軸とした研究が、一つは歴史研究（とりわけ日本史研究）に対して、今ひとつは人文科学全体に対して、どのような寄与をし得るのか。本研究が個別分散化が指摘されている日本史研究や人文科学研究を再編し総合化する核となるのではないかと、いう見通しを持って、研究の行く末を見定めたい。

（3）いま、日本史研究、人文諸科学において「書物・出版と社会変容」研究が注目を集めている。しかし、それを一過性のブームに

終わらせてはいけない。個別事例をつぎつぎと掘り起こしていくことは大事であり、そこに研究の出発点がある。しかし、それで終わってしまえば研究は尻すぼみになる。蓄積した事例を「総合化」していく作業、たとえば書物・出版に焦点をあわせることによって、どのような時代像を結ぶことができるのかといった、より高次の課題に取り組んでいかねばならない。「書物・出版と社会変容」研究の総合化に向けて、牽引役を果たしていきたい。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究では、近世出版文化を、A書物・出版と環境、B本屋・出版、C写本と刊本、D流通、E享受者・読者、F作者・思想家、G古代・中世、H近現代の八つの研究項目班に分ける。A～Hの研究項目は、「<知>が循環する過程」であり、それぞれが密接に関わっている。そこで各班で議論をするときには、班長が中心になるが、班を越えて研究者が集えるよう、班の垣根を低くすることにしたい。



(2) 研究項目班とは別に、日本全国を九つに分け、9フィールドワーク班を設定し、専攻を異にする研究者が、共同で日本各地の資料(史料)の発掘・整理を行う。

- |           |          |
|-----------|----------|
| 1班 沖縄奄美   | 班長 小池 淳一 |
| 2班 九州     | 班長 鈴木 理恵 |
| 3班 中国     | 班長 引野 亨輔 |
| 4班 四国     | 班長 西村 浩子 |
| 5班 近畿     | 班長 横田 冬彦 |
| 6班 東海     | 班長 浅岡 邦雄 |
| 7班 甲信越    | 班長 高橋 明彦 |
| 8班 関東     | 班長 杉本 史子 |
| 9班 東北・北海道 | 班長 高橋 章則 |
| 全体統括      | 若尾 政希    |

(3) 本研究の要となるのが、「書物・出版と社会変容」研究会である。先に述べた、8研究項目班と、9フィールドワーク班の成果を持ち寄り、研究目的で掲げた課題を解決するために議論する場が、この研究会である。月例で開催し、各回、2～3人の方に研究報告をしてもらい討論をするとともに、研究項目班とフィールドワーク班からの報告・質疑と参加者の研究交流を行いたい。書物・出版の資料論について議論するのも、この場である。この研究会での討議結果を研究項目班・フィールドワーク班にフィードバックしていく予定である。各年度8回ほどの開催を予定している。

(4) 「書物・出版と社会変容」研究会を東京以外の各地に会場を移し開催する。各地の書物・出版に関心を有している研究者と交流するとともに、現代までの書物・出版文化までを視野にいたした市民向けの講演会を年に1回企画し、研究成果を社会に向けて発信する。

(5) 毎年二冊、その一年の研究成果を取りまとめた報告書『書物・出版と社会変容』を作成したい。報告書には、研究項目班のレポート、フィールドワーク班からのレポート、資料調査の目録、月例研究会での研究報告の要旨あるいは論文、及び投稿論文等を掲載する。あわせて、プロジェクト報告書も適宜刊行する。

(6) 研究者・学生・一般市民も対象とした、講座ものの図書や新書等を積極的に利用して、研究成果を広く発信する。

### 4. 研究成果

(1) 本研究では、A書物・出版と環境、B本屋・出版、C写本と刊本、D流通、E享受者・読者、F作者・思想家、G古代・中世、H近現代の8つの班を設定し、班ごとの研究を進めるとともに、日本の出版文化をこの8つ研究視角から捉えることの是非について議論した。

(2) 全国各地(16の都道府県)でフィールドワークを行い、書物・出版研究に関わる史料を調査し、デジタルカメラで撮影した。

(3) それぞれの研究班の成果を持ち寄って、「書物・出版と社会変容」研究会を開催した。この3年間に25回の研究会(第38回～第62回)を開催した。一橋大学佐野書院を会場に行う研究会とは別の、愛知県西尾市(岩瀬文庫)、宮城県仙台市(東北大学狩野文庫)、石川県金沢市にて研究会を開催し、地元の研究者や市民にも参加を呼びかけ、熱心な議論

を行った。

(4) 一年の研究成果を取りまとめた雑誌『書物・出版と社会変容』を、3年間で6号(第5号～第10号)編集・印刷し、全国の教育・研究機関、史料保存機関に配布するとともに、一橋大学機関リポジトリで公開した。収載した論考は全部で40本、総頁は1110頁である。『書物・出版と社会変容』は、「書物・出版と社会変容」研究会・コミュニティ・ホームページで公開している。

(<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/16282>) (一橋大学機関リポジトリ)

(5) 雑誌『書物・出版と社会変容』とは別に、研究成果報告書として、『官立長崎師範学校の蔵書に関する報告書』(研究分担者：鈴木理恵)を印刷した。これは官立師範学校の蔵書を扱ったはじめての画期的な研究である。

(6) 本研究の中間報告と、一般市民への広報を兼ねて、『歴史評論』710号に「書物・出版と日本社会の変容」(2009)という論文を発表した。

(7) 書物・出版と社会との相互関係の様相を解き明かす「書物・出版と社会変容」研究が、日本史研究や人文諸科学に大きな刺激を与え続けていることは確かであるが、そうした研究をさらに「深化」させるとともに、「一般化」させるために、研究計画を再構築して、「研究計画最終年度前年度の応募」を行い、無事採択された(2011～2015年)。課題名は「書物・出版と社会変容」研究の深化と一般化のために」であり、キーワードは「深化」と「一般化」である。一方で「書物・出版と社会変容」を基軸とした研究をさらに深めることによって、みんなが共有できるような(あるいはたたき台にできるような)史料論や研究方法論を体系的に提示する必要がある。と、同時に、「書物・出版と社会変容」を基軸とした研究を一部の研究者だけのものとするのではなく、広く一般化するため、全国各地の研究者と研究交流する場を設定し、地域にそうした研究を根付かせていかねばならないと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計50件)

- ① 浅岡邦雄、明治期出版をめぐる権利と報酬、江戸文学、42号、査読無、2010、123～133頁
- ② 引野亨輔、“暴君”と“名君”のあいだ、

福山大学人間文化学部紀要、10号、査読無、2010、61～81頁

③ 柳沢昌紀、甫庵『信長記』の異文復古と『太閤記』、江戸文学、41号、査読無、2009、7～19頁

④ 鈴木理恵、近世後期、神職の在京生活と交遊、広島大学大学院教育学研究科紀要、58号、査読無、2009、17～26頁

⑤ 佐藤貴裕、一七世紀節用集における検索補助法、国語語彙史の研究。28号、査読有、2009、157～175頁

⑥ 若尾政希、書物・出版と日本社会の変容、歴史評論、710号、査読有、2009、54～61頁

⑦ 山本英二、日本中近世における由緒論の総括と展望、歴史学研究、847号、査読有、2008、2～10頁

⑧ 若尾政希、近世人の蔵書形成と書物の流通、日本文学、57号、査読無、2008、50～58頁

⑨ 若尾政希、近世人の蔵書形成と書物の流通—信州更級郡岡田村寺澤直興の場合—、日本文学、57号、査読無、2008、50～58頁

⑩ 曾根原理、日本伝統文化遺産のデジタル化の現況と展望—東北大学における歴史資料活用を中心に—、国学研究(韓国・国学院振興院)、12号、査読無、2008、205～262頁

[学会発表] (計18件)

① 柳沢昌紀、出版を前提とする戦記—『大坂物語』の場合—、軍記・語り物研究会、2011年1月23日、早稲田大学

② 若尾政希、近世日本の思想史的位置、シンポジウム「比較史的にみた近世日本—東アジアの中の日本」、2010年11月25日、明治大学

③ 若尾政希、安藤昌益の思想形成—米・自然・飢饉—、韓国全北大学国際学術会議、2010年10月26日、全北大学(韓国)

④ 小池淳一、里修験と陰陽道—新出の『ホキ』の分析を中心に、日本宗教学会第68回学術大会、2009年9月12日、京都大学

⑤ 横田冬彦、日本近世村落社会の蔵書家たち、第2回漢文古典翻訳国際学術会議、2009年1月16日、韓国成均館大学

[図書] (計21件)

① 「書物・出版と社会変容」研究会(若尾政希)編、『書物・出版と社会変容』第10号、2011、152頁

② 「書物・出版と社会変容」研究会(若尾政希)編、『書物・出版と社会変容』第9号、2010、158頁

③ 「書物・出版と社会変容」研究会(若尾政希)編、『書物・出版と社会変容』第8号、2010、269頁

④ 若尾政希・菊池勇夫編、吉川弘文館、『<江戸>の人と身分5 覚醒する地域意識』、2010、

238 頁

⑤鈴木俊幸、平凡社、『絵草紙屋 江戸の浮世絵ショップ』、2010、262 頁

⑥鈴木理恵、『官立長崎師範学校の蔵書に関する報告書』、2010、114 頁

⑦「書物・出版と社会変容」研究会（若尾政希）編、『書物・出版と社会変容』第7号、2009、158 頁

⑧「書物・出版と社会変容」研究会（若尾政希）編、『書物・出版と社会変容』第6号、2009、173 頁

⑨牧野和夫、和泉書院、『日本中世の説話・書物のネットワーク』、2009、492 頁

⑩柏崎順子、太平書屋、『菅茶山遺稿』、2009、303 頁

⑪「書物・出版と社会変容」研究会（若尾政希）編、『書物・出版と社会変容』第5号、2008、200 頁

⑫小川和也、平凡社、『牧民の思想—江戸の治者意識』、2008、390 頁

〔その他〕

研究代表者若尾政希ホームページに、本研究の成果に関する情報があります。

（<http://www.soc.hit-u.ac.jp/~wakao/index.htm>）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

若尾 政希 (WAKAO MASAKI)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：80210855

### (2) 研究分担者

横田 冬彦 (YOKOTA FUYUHIKO)

京都橘大学・文学部・教授

研究者番号：70166883

鈴木 俊幸 (SUZUKI TOSHIYUKI)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：00216417

牧野 和夫 (MAKINO KAZUO)

実践女子大学・文学部・教授

研究者番号：70123081

山本英二 (YAMAMOTO EIJI)

信州大学・人文学部・准教授

研究者番号：20262678

柳沢 昌紀 (YANAGISAWA MASAKI)

中京大学・文学部・教授

研究者番号：60267896

柏崎 順子 (KASHIWAZAKI JUNKO)

一橋大学・大学院法学研究科・教授

研究者番号：20262389

高橋 章則 (TAKAHASHI AKINORI)

東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：10187990

杉本 史子 (SUGIMOTO FUMIKO)

東京大学・史料編纂所・准教授

研究者番号：10187669

曾根原 理 (SONEHARA SATOSHI)

東北大学・学術資源研究公開センター・助教

研究者番号：30222079

引野 亨輔 (HIKINO KYOSUKE)

福山大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：90389065

佐藤 貴裕 (SATO TAKAHIRO)

岐阜大学・教育学部・教授

研究者番号：00196247

小池 淳一 (KOIKE JUNICHI)

国立歴史民俗博物館・研究部・准教授

研究者番号：60241452

高橋 明彦 (TAKAHASHI AKIHIKO)

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・准教授

研究者番号：00264573

西村 浩子 (NISHIMURA HIROKO)

松山東雲女子大学・人文科学部・教授

研究者番号：20248339

八鍬 友広 (YAKUWA TOMOHIRO)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：80212273

鈴木 理恵 (SUZUKI RIE)

広島大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：80216465

浅岡 邦雄 (ASAOKA KUNIO)

中京大学・文学部・准教授

研究者番号：20454358

小川 和也 (OGAWA KAZUNARI)

一橋大学・大学院社会学研究科・特任講師

研究者番号：90509035

(H22：研究協力者)